

武蔵野日曜集会

カイロス

――ヨハネ伝第7章――

1967年11月19日(武蔵野)

小池辰雄

わが時はまだ到らず わが教はわが教にあらず 神よりか、己よりか 律法の根本精神 どん底 時は満ちたり カイロスをつかむ 天時 神的権威 時は縮まれり 万の事には時あり 内接円的關係 盛んなる靈的生命の世界 無私の場にこそ聖霊が臨んでくる 迦葉利竿

【ヨハネ7】

1 この後イエス、ガリラヤのうちを巡り給う、ユダヤ人の殺さんとするに因りてユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり。² ユダヤ人の仮庵の祭ちかづきたれば、³ 兄弟たちイエスに言う『なんじの行う業を弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。⁴ 誰にても自ら顕れんことを求めて隠に業をなす者なし。汝これらの事を為すからには己を世にあらわせ』⁵ 是その兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。⁶ ここにイエス言給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。⁷ 世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作の悪しきを証すればなり。⁸ なんじら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』⁹ かく言いてなおガリラヤに留り給う。

¹⁰ 而して兄弟たちの、祭にのぼりたる後、あらわならで潜びやかに上り給う。¹¹ 祭にあたりユダヤ人等イエスを探ねて『かれは何処に居るか』と言う。¹² また群衆のうちに囁く者おおくありて、或は『イエスは善き人なり』といい、或は『いな群衆を惑わすなり』と言う。¹³ 然れどユダヤ人を懼るるに因りて誰もイエスのことを公然に言わず。

¹⁴ 祭も、はや半となりし頃イエス宮にのぼりて教え給えば、¹⁵ ユダヤ人あやしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書を知るか』¹⁶ イエス答えて言給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。¹⁷ 人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。¹⁸ 己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真なり、その中に不義なし。¹⁹ モーセは汝らに律法を与えしにあらずや、然れど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆえ我を殺さんとするか』²⁰ 群衆こたう『なんじは悪鬼に憑かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』²¹ イ



エス答えて言い給う『われ一つの業をなしたれば汝等みな怪しめり。²² モーセは汝らに割礼を命じたり(これはモーセより起りしとにあらず、先祖より起りしなり)この故に汝ら安息日にも人に割礼を施す。²³ モーセの律法の廃らぬために安息日に人の割礼を受ける事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健全にせしとして我を怒るか。²⁴ 外貌によりて審くな、正しき審判にて審け』

²⁵ 爰にエルサレムの或る人々いう『これは人々の殺さんとする者ならずや。²⁶ 視よ、公然に語るに之に対して何をも言う者なし、司たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。²⁷ 然れど我らは此の人の何処よりかを知る、キリストの来る時には、その何処よりかを知る者なし』²⁸ 爰にイエス宮にて教えつつ呼わりて言い給う『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。されど我は已より来るにあらず、真の者ありて我を遣し給えり。汝らは彼を知らず、²⁹ 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり』³⁰ 爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。³¹ 斯て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト来るとも、此の人の行いしより多く徴を行わんや』と言う。³² イエスにつきて群衆のかく囁くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕えんとて下役どもを遣ししに、³³ イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。³⁴ 汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』³⁵ 爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいずこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りおる者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。³⁶ その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』³⁷ 祭の終の大なる日にイエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば我に來りて飲め。³⁸ 我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』³⁹ これは彼を信する者の受けんとする聖霊を指して言い給いしなり。イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざりしなり。⁴⁰ 此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ真にかの預言者なり』といい、⁴¹ 或人は『これキリストなり』と言ひ、又ある人は『キリスト争でガリラヤより出でんや、⁴² 聖書にキリストはダビデの裔またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。⁴³ 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争おこりたり。⁴⁴ その中には、イエスを捕えんと欲する者もありしが、手出する者なかりき。

⁴⁵ 而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に歸りたれば、彼ら問う『なに故かれを曳き來らぬか』⁴⁶ 下役ども答う『この人の語るごとく語りし人は



未だなし』⁴⁷。パリサイ人等これに答う『なんじらも惑わされしか、⁴⁸ 司たち又はパリサイ人のうちに一人だに彼を信ぜし者ありや、⁴⁹ 律法を知らぬこの群衆は詛われたる者なり』⁵⁰ 彼等のうちの一人にて曩にイエスの許に來りしニコデモ言う、⁵¹ 『われらの律法は先その人に聴き、その為すところを知るにあらずば、審く事をせんや』⁵² かれら答えて言う『なんじもガリラヤより出でしか、査べ見よ、預言者はガリラヤより起る事なし』⁵³ 斯ておのおの己が家に帰れり。

●わが時はまだ到らず

¹この後イエス、ガリラヤのうちを巡り給う、

過越のお祝いによく出かけて行かれましたが――過越の祝いというのは4月の春のことですが、ここに出てくる「仮庵の祭」というのは秋のことです――半年ばかりガリラヤの方を巡っておられたわけです。

ユダヤ人の殺さんとするに因りてユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり。

ユダヤ人が殺そうとするのでユダヤのうちを巡ることを欲しなかった。キリストはなにも殺されることを恐がつたわけではないので、時期がある。彼はやがて十字架にかかることを予見しておられた。

²ユダヤ人の仮庵の祭ちかづきたれば、

旧約聖書を見ると、7月15日から一週間ということがレビ記にも民数記略にも書いてあります。7月というのは、こちらで数えると10月になるわけです。大体、10月から11月の頃、ちょうど秋の実りを収穫する頃、いわゆる「サンクスギビングデー」というわけです。11月23日の勤労感謝の日は、収穫を感謝する日なんです。また、イスラエルの夏は日照りが続いて暑いですから、雨の降ることを望むので、雨乞いの祭もそこに加えられるようなこともあるようです。「仮庵の祭」というのはもともと「コーヘール」「幕屋」という字ですから、「幕屋祭」と言ってもいい。イスラエルの民が荒れ野の旅をしているときに、いわゆる天幕を張りながらまた畳んでそれを担いでは旅をしていたわけです。それからまた、それが神との祈りの、「出会いの幕屋」という場合もあります。大体、この「仮庵の祭」のときは収穫ですから、天幕の外側に葦をかけるという話ですが。

³兄弟たちイエスに言う『なんじの行う業を弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。

「兄弟」というのは――イエスは長男ですが――弟たちです。「お前の業を弟子たちにも見せるために、ここを去つてユダヤに行つてひとつ――だいぶ変わったことを言つたりしたりするが――おおいにそれを宣伝したらどうだ」というような気持ちかも知れませんね。

⁴誰にても自ら顕れんことを求めて隠に業をなす者なし。汝これらの事を為



すからには己を世にあらわせ』

「エルサレムは天下の中心だから、そこへ行っておおいに旗をあげたらどうだ」というようなことなんです。

⁵ はその兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。

イエスの本当のことが分かっていない。イエスの救う事態を本当に受けとることができないというわけです。この場合の「信ぜぬ」ということは、まことの意味がわからないということ。

⁶ ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。』

「わが時はいまだ到らず」というこの「時」という字が「カイロス」という字で、今日は「カイロス」という題を掲げたのはそういうわけです。キリストの使った言葉はもちろんギリシア語ではなくてヘブライ語ですから、「ヘース」と言われたんだけど。ギリシア語でいえば「カイロス」です。

「自分のカイロスがまだ来ていない。お前たちの時はあるんだが」

と。「カイロス」というのは、「時」といいましても、「時機」――「戦わんかな、時機至る」という一高の寮歌がありますが、あの時機ですね――いわゆる「時間」というよりも、「時機」というときによく使われる。「時が満ちた」という言い方も正にこの「カイロス」です。

⁷ 世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、

お前さんたちは世の中の連中と同類だから憎まれないけれども、私は違うものだから憎まれると。

我は世の所作の悪しきを証すればなり。

忌憚なく、その間違っていることを言うものだから憎まれる。

⁸ なんじら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』⁹ か
く言いてなおガリラヤに留り給う。

これは三大節の一つですから、「あなた方はみんな行ったらいいでしょう。私は行かない」と。

¹⁰ 而して兄弟たちの、祭にのぼりたる後、あらわならで潜びやかに上り給う。

遅れて時機をはずして、忍びやかに行かれたという。

● わが教はわが教にあらず

¹¹ 祭にあたりユダヤ人等イエスを尋ねて『かれは何処に居るか』と言う。¹² ま

た群衆のうちに囁く者おおくありて、或は『イエスは善き人なり』といい、

或は『いな群衆を惑わすなり』と言う。

イエスは善い人とか、あるいは群衆を惑わすデマゴグだとか、言うようなわけです。

とにかく、人間というものは陰で言いたがるものです。陰で人のことをどうのこうのと言う。そうした陰の言葉というものが非常にまた伝わりやすい。そしてまたそれが信じら



れやすい。これがみんな人間関係を崩していく。何か言いたいことがあったら、それは二人称で――三人称的でなくて、「あのひとは」ではなくて、「君は、僕は」という――目と目とを合わせて相手の人と語ること。これが一番間違いないことです。そうすれば、お互いにもし誤解があれば解けるし、判断の間違いがあれば説明もできるだろうし、悪かったならば「済まなかった」と言うだろうし。とにかく、みな直接に、しかも相手を思いやつて、思いやりをもって語ることが一番大事なことです。思いやりをもって語って解けないことはいはずです。

まあ、囁いて、善いの悪いのと言っているわけです。

¹³然れどユダヤ人を懼るるに因りて誰もイエスのことを公然に言わず。
陰口ばかり言っている。

¹⁴祭も、はや半となりし頃イエス宮にのぼりて教え給えば、
今度は、イエスはちゃんと時を見られたわけです。始めは、忍びやかに行かれたんですが、そうかと思ったら今度は、

イエス宮にのぼりて教え給えば、¹⁵ユダヤ人あやしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書を知るか』

「ドラマ」という字はこの「書」という字からくる。「どうして、書が分かるか」と。イエスは素人ですから、大工の子ですから、別に正式に勉強したわけではない。シナゴグに通っていたくらいなものです。

¹⁶イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。¹⁷人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。

今日の7章6節と、この16、17節が大事なところです。

「私の教えは自分のではない。自分は無教である」

無教者である。自分には教えなんてものはないと。無教の教ということ。私を遣わした者の教えである。自分は遣わされた者で、自分は使いにすぎないと。「使徒」という言葉がありますね。あれと同じことで、

「自分は神さまから遣わされた使徒である。教えなんてものではありません。私は神さまから学んでいるだけのなし。言えと言われていることを言っているだけのなし。天来の言葉を伝えていただけだ」

と。「学びし事なき」とは、人間からは学んでない。神さまから学んでいる。これは本当の神学者なんだ。キリストが本当の神学生です。神から学んでいる生徒なんです。今の神学生なんてものはみんな人から学んでいる神学生で、いわゆる神学校を出たって、本当は聖書の講解なんてできるはずのものではないんだ、どんなに知識があっても。これは上から押し出されて語るのでなければ、「について」いくら語りましても、それは響かない。



●神よりか、己よりか

そこでそこに書いてあるんです、

「神よりか、己よりか」

と。自分から発しているか、神から来ているか。神から来て、そして自分の中にその言葉が入ってきて、そして内側から語る。それが本当の教えである。

偉大な芸術家も自分で工夫して作曲していない。ベートーベンあたりも、森の中を散歩しながら靈感にうたれて、憑かれたようにして作曲した。モーツアルトも、バッハももちろんそうです。真理が示されてくるわけです。それは真理を探究する熱意があるから、上から示されてくる。もちろん、書かれたものを人から学ぶことは第二の手段として、いくらでも結構なことです。究極のものは、一番本質的なものはみな上からくる。何か仕事をするに当たって本当はそうなんです、すべてがね。

「神より」というのは「エック・テウ」という。「自分から」というのは「アポー」という字が使っている。「エックか、アポーか」というわけです。「エック・テウ」という、神から、キリストから、上からやってくる。だから、いわゆる教育というものと本当の神の教育とは角度が反対になっている。だから、キリストははつきり、

「わが教はわが教にあらず」

と言われた。キリストは何も書かない。一字も書きやしない。正に不立文字ふりゆうである。お釈迦さんも何も書かない。孔子もソクラテスも書かない。あれはみんな弟子たちが書いた。本当の第一級の人物は何も書かない。自分自身が文字です。だから、活字かつじという。活きた文字。活字というのはそこにあるものではない。本当は活ける文字という、我々自身が即ち活ける文字である。パウロも、

「汝らはキリストの書ふみなり」

と言った。大著述をした人と何も書かなかった人と、どっちが本当の文字を書いたか。それは神さまの目にはわかる。

水の上を走る船や空を飛ぶ飛行機のようなもので、通った跡がわからない。通った跡がわからないような歩き方、したことが人にわからないような歩き方。それは、しかしながら、天上には映っている。神の巻物にはちゃんとそれが映写されている。そういうような気合になってきたら、もう本当に楽になるわけです。相対的な体裁がいらなくなってしまうから。私は自分があまり書かないことの弁解ではないけれども、録音機が書いてくれるものだからね。それで、自分で書くのが面倒臭くなる。そこにたくさん録音テープが積んであるけれども、いずれ私が地上を去りましてから、ご面倒でも少しづつやってください。

そういうのが、

「この教えの神からか、またわが己より語るか」

と。己から絞り出しているようなのは、それは本当に人に生命を与えない。魂の本当の響



きを伝えない。預言者から、永遠者から受けた響きというものは響きがちがうと。それがキリストの文字であった。ソクラテスがダイモニオンによって導かれてものを言っていたのがそれであった。お釈迦さんもちろんそうです。

18 己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真なり、

「神さまの栄光を求めて、この私の言葉から神の栄光が現われているんだぞ」

と。これがキリストの自覚であります。ですから、キリストはそう言った。だからそれは、その中に不義なしと。

●律法の根本精神

19 モーセは汝らに律法を与えしにあらずや、然れど汝等のうちに律法を守る者なし。

一向、本当に守ってないねと。

汝ら何ゆえ我を殺さんとするか』

「殺す理由がないじゃないか。私は一番本当の意味で律法を守っているんだよ」

と。外側は、ちよつと律法を破っているようにみえるかもしれないけれども、モーセの律法の根本精神はイエス・キリストが実はそこに開示している。モーセも思いつかなかったようなものであります。もちろん、モーセも神に示されています。しかし、示されていても、その真意はモーセ自身もまだ分からなかった。その真意を本当につかまえた者がイエスであつた。

だから、山上の垂訓にあるあの言葉が律法の一番奥をついている。カントの道徳哲学も結局、このキリストの内面的な道徳観から発しているわけです。それがパウロに表れ、ルターに響き、カントにまた哲学的な響きを持つている問いかけであります。

『兄弟を殺すなかれ』とあるけれども、兄弟を憎む者は即ち、殺したのである」

と、キリストの鋭い――日本人には勘というものがありませんね、勘がいい。ドイツ人はよく論理でものを言うけれども、その点ではドイツ人は勘が少しにぶいところがあるようですが。日本人には、勘というやつがある。甚だしい力を私たちは持っている――直感力ですね。ものの中核に、本質にグツと見入る世界。それを何とも言えなく感ずる勘というやつ。

申し上げているとおり、

「汝は殺すべからず」

というのは

「汝は殺人しない」

という言い方です。



「私がお前の神だから、お前は殺人なんかしない」

と。その信頼の言葉として受けとつたのがキリストである。

20 群衆こたう『なんじは悪鬼に憑^つかれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』²¹ イ
エス答えて言い給う『われ一つの業をなしたれば汝等みな怪しめり。²² モー
セは汝らに割礼を命じたり(これはモーセより起^{おこ}りしとにあらず、先祖より
起りしなり) この故に汝ら安息日にも人に割礼を施す。²³ モーセの律法の廃^{すた}
らぬために安息日に人の割礼を受くる事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健
かにせしとして我を怒るか。

安息日にキリストが病人を癒したりしたでしょ。たとえばそのようなこと。

24 外貌^{うわ}によりて審^さくな、正しき審判^{さばん}にて審け』

ただ律法を外側から厳守しているのがユダヤ人です。今もあいかわらずそうです。金曜日の夕方から土曜日の夕方までが向うの安息日だから、金曜の日暮れから土曜の日暮れまで、何も煮炊きをしない。電車も自動車もみんな止まってしまふ。全くおくれた民族ですよね。とにかく非常に律法なんだよな。パウロがサウロと言われた頃にそのチャンピオンであつた。ところが、キリストにすっかりひっくり返されて、そういう

「教条的な、外側から守ることではなかった」

というわけです。内側から神の法則の中に乗つかることである。そういう大転回がない。ユダヤ人はあいかわらず、イエスという素晴らしいものを出し、パウロという素晴らしい人を出しながら、なお目が覚めない。彼らがなぜひっくり返つたかということをも今のユダヤ人はあいかわらず受けとらないという、実に不思議な事実ですね。

神さまは憐れみの神であるから、いついかなるときにその神の憐れみが発動するかかわらない。安息日であろうと、そんなことは問題ではない。そして本当に人を実は安息の中に、神の安らいの中に入れるわけです。安息日というのは、我々はただ休むということではなくて、神さまの安らいの中に、神の平安の中に入ることであつて、それによつて実は甚だしい力を得るわけです。安息日に本当の力を我々はこの集会で得る。

●どん底

ところで、もとへ返りまして、

6 ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、

とある。「時」について少し調べてみたいと思います。一番先に出てくるのは、マルコ伝一章15節です。

「¹⁵『時は満ちり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ。』」
これは千古の名言であります。

「時は満ちた。神の国は近づいた。汝ら、回心して、心をめぐるして、福音を



受けとれ。喜びのおとずれを受けとれ」

と。「時が満ちた」という。人生は要するに、カイロスを本当につかむかどうかで、もう人生が本当の成功——成功というのはこの世的な意味ではないですよ——本当に成功であるか失敗であるかは、このカイロスをつかむつかまなかに決すると言つて過言でないわけです。

私は自分の生涯を振り返ってみると、中学から高等学校、昔の旧制高等学校の受験の頃に私の兄が北京で仆れた。自分の父とも頼んでいた兄が——母はせっかく仕上げてこれから兄によつて大いにと思っているやさき——27歳にして仆れた。母は独りで非常に苦勞しました。五人の子どもを育てたんですから。それで、母は過勞と非常な失望落胆で失明してしまった。家はたたんでしまったし、私は叔父さんの厄介になつたし。私もまた病氣になつてしまった。三重の苦難で暗黒の中に突き落とされた。正にどん底に來たわけだ。このどん底が私にとつてはその時のカイロスであつた。時が満ちた。私はそんなことは自分ではちつとも知らない。神さまの目からみると、

「この時にお前は本当のものをつかまなかつたら、しょうがないぞ」というわけです。

そのどん底で取り上げたのが、内村鑑三の『宗教と現世』という本であつた。今でも忘れません。その本の第一章に、

「宗教は人間の最大の関心事である」

ということが書いてある。これにぶつかつて、その時に不思議に私に訴えた。「これだ。よし」と。非常にその文に打たれたものですから、それで内村鑑三先生の集會に出かけて行つた。これが私の人生のカイロスで、別な次元に入つて行つた。

どん底のときに、人生の大事な時に断層がある。その断層を飛び越えるかどうか。だから、私は学校の生徒に言うんです。

「君たちは、20前後から25歳くらいまでは非常に大事なときなんだ。そのときに本当につかむものをつかみそこなうと、なかなか後は……」

ということだと。それはただ人間が教えるというようなことではない。ある絶対な次元に魂が触れなくてはいいかん。魂というのは絶対次元を要求しているものなんだ。だから、私は、

「万人は宗教人である」

と言っている。魂は絶対次元のものに触れなければ、どうにもならないようにできている。どうして、そのことに気がつかないか。

●時は満ちたり

今は、日本に限らない、世界がちよつとおかしくなっている。そういう次元でないもので大騒ぎしているだけのなし。知識の面ではえらく進んでいるけれども。ソ連では、宇



宙空間から攻撃するようなものを造っているらしい。そんなものを使って戦争を始めたらもうおしまいですね。とにかく、先へ先へとの凄惨なものを造って世界を破滅にもつていこうとしている。非常に危機的な事態です。それでも、それがいかに悲惨なものであるかが分かっていっているものだから、何とかして平和をと言って一生懸命でやっているわけだけども。

しかし、何でもない。みんながその次元のことに気がついて、イデオロギーはそれぞれで結構だが、イデオロギーよりかもうひとつ奥の世界の、本当の霊的世界の、人間性の一番深いところの――魂がそこにおいては万人が共通の場がある。その万人共通の響きの世界――その響きの世界に入れば、もう戦争の平和のなんて言わなくても、落ち着いて行くわけなんだ。ところが、これがどうしてもなかなか現実にはいかない。

「末の世に信を見んや」

とキリストが言った。もう末の世になれば、そこに一体、信仰があるだろうか。『神とのつながり』ということが信仰ということ。神とのつながりがあるかどうか。『時は満ちた』というのも、これもそうなんです。ユダヤ教が素晴らしくなったから、という意味ではない。ユダヤ教は暗黒の中に閉ざされている。いよいよパリサイ的になる。形式的になり、動脈硬化を起こしてしまっている宗教状態である。今にしてそこを突き破らなかつたらば、しようがないんだと。そこがキリストが受けとつたところの、『時は満ちたり』ということ。限界情況に來たと。この限界情況を突破しなければ。それはもう絶対次元からの何ものかによって突破をしなければ。それが、

「時は満ちた。神の国は近づけり」

ということ。暗黒から今度は夜明けとなる。いよいよ夜明けの時だと。その夜明けを知らせる者は誰かというと、彼自身が即ち夜明けの主体である。彼自身が太陽である。夜明けをもたらすもの。自分が、神の光を賜っている太陽ですから。

「時は満ちた。神の国は近づいた。私が来たから、本当に神の国はここに來たぞ。

心を翻して――自分を見るのでも、人を見るのでもないぞ――この霊界の天を仰げ」

と。「心を翻せ」ということですよ、この「悔い改めよ」ということは。なにも、悪かったと言つて悔い改めることではない。

「心を翻して、この喜びの音信おとずれを受けとれ。今までのユダヤ教ではどうにもならん。

今、私が言うところの、この天来の音信、喜びの歡喜の音信を受けとれ」

と。「時は満ちた」と。これは、「行き詰まってどうにもならん」と思ったときに、絶望して自殺したらおしまいですよね。

「行き詰まった時こそ実はカイロスであるから、そこで次元の違った世界に自分を投げ入れよ」



と。投げ入れればいい。投身する。水の中に投身してはいかん。

「キリストの中に投身せよ」

と。キリストの懷の中に入る。誰でもができることです。こればかりは実は誰でもができることです。何も要らん。準備も何も要らん。

「そのまま、あるがままの自分をなげいれろ。行き詰まった自分をそのまま投げ入れろ」

と。そうしたらば、この驚くべき生命の、力の、光の、愛の、本当の知恵の、このキリストによって、

「せんかた尽くれども絶対に望みを失わない。倒されるれども滅びない」

とパウロが言った、このことです。これ、カイロスなんです。

●カイロスをつかむ

とにかく、大事な瞬間を捕まえないければ。例の『ファウスト』の言葉があるとおり。

「瞬間を本当に捕まえる者、それが本当の人間である」(2017〜2018行)

という。瞬間をつかむ。その瞬間を逃すと、またなかなかでつくわし難いという瞬間がある。人生は限界のある時間ですから。まさに時限ですから、その時限の中の大事な瞬間をグツとつかんでいかないと、つまつてしまう。

私もつかみそこないがいっぱいあったと思いますよ。だから、こんなしょうがないやつですけれども。もし、私がカイロスを本当に一つ一つしっかり捕まえていったら、私の人生はもつと違ったものになったと思う。けれどもとにかく、「もうダメだ」という時は、それにもかかわらず人生の終りまでありません。

「これでもう私はダメだ」

ということはない。ダメであるから、ダメである時こそ、ダメでない世界がまた開けてきますから。

十字架の片一方の盗賊はもう最後の瞬間だよ、あれは。もう、自分もキリストと同じように仆れてしまう。

「私は悪かった。せめても、あなたが御国にいらっしゃる時に、私を覚えてください」

と言ったら、

「よし、お前は今日、私と一緒にパラダイスにいる」

と。これが最後のカイロスをつかんだ盗賊です。この盗賊は十字架上で最後のカイロスをつかんで、キリストと一緒にまっ先に天上に、神の国に昇ってしまった。どうぞ、そういうことでありますので。

カイロスをつかむためには、一体、どういう心が大事なのか。相対的現実の現象面に目が



くらんでいるうちは、そのカイロスがつかめない。「ああだ、こうだ」なんてやっているうちは、いつも、祈り心が大事です。祈り心で神の摂理を、神の御意の動きを、見かつ聞いていることです。そういう心で――その相対的現実はどうでもいいと言うのではない――その相対的現実に向かつていくと、その相対的現実にとらわれるのではなくして、その中にチラッと見えるところの現象において、そのカイロスの徴を見ることがある。神さまはその相対的な現象の中に時々何かを示す。それをよく見ていないとわからない。

物理の世界でもうそうだ。ニュートンが、何か物理的法則を発見しようと思って、いつも物理的法則の真理に対して目を向けているから――リンゴが落ちるのは誰でも知っている――その落ちるという何でもない現象において、ハタと真理を捕まえる。それが本当にカイロスをつまえた人なんです。真理をつまえさせる時機というものが、彼においてその時に満ちたわけです。

運命・環境に押し流されてはダメですよ。運命・環境というものに楽に従いながら、それを乗り越えていく。無理やりな抵抗をするとかたびれる。楽に従いながら、そいつを支配し乗り越えていくような、そういう魂はいつも神との交わりの中にある時にできるわけです。神の機が熟するという、その神機をつまえなくてはいいかん。

「もうこの辺で俺はもう方向転換して、自分の生涯の仕事に取りかかろう」なんてなことだね。そいつはカイロスなわけです。人によっていろいろカイロスの時機や内容が違うわけです。

●天時

マタイ伝16章3節に、

「パリサイ人とサドカイ人と来りてイエスを試み、天よりの徴を示さんことを請う。答えて言いたもう『夕には汝ら「空あかき故に、晴ならん」と言い、

3 また朝には「そら赤くして曇る故に、今日は風雨ならん」と言う。』

こちらで言うことと同じことだね。夕焼けがくると翌日は天気だろう。朝焼けが来ると雨になるだろうという。

なんじら空の気色を見分けることを知りて、時の徴を見分けること能わぬか。

この「時の徴」の「時」が「カイロス」です。このカイロスの「セイメイオン」(徴)を見分けることができないかと。

4 邪曲にして不義なる代は徴を求む。然れどヨナの徴の外に徴は与えられじ』
斯て彼らを離れて去り給いぬ。」(マタイ16・1〜4)

いや実に、

「キリスト自身が徴であることがわからないか」

ということが言外にあるわけです。イエス自身が神の徴なんです。このキリストという驚



くべき徴を見損なっているわけです。

お忍びでキリストが行かれた。そして、カイロスが満ちれば、キリストが公然と語りだす。忍びの人というのがあるね。イエスなんてのは、忍者だったら最高の忍者だろうと思う(笑)。捕まえようとしたって、イエスは捕まらない。捕まる時は、みずから出て行って捕まってしまう。

「我なり」

と言って出て行ったら、ローマの兵隊が幾人か倒れてしまった。そのキリストの天的な權威に驚いてね。

ですから、カイロスは正に天時と言ってもいいわけです。天の時です。アウグスチヌスはこの「カイロス」のことはあまり書いてないようだな。時間のことを一生懸命で考えている。一体、過去とは何か、現在とは何か、未来とは何かと。一体あるかないかなんて。

「過去は記憶のうちにあるところの何ものかで、記憶のうちにある現在であり、現在には直視できるところの、直感するところの今であり、未来は期待されるところの今である」

なんて、なかなかうまいことを言うね、あのアウグスチヌスは。

ここで言うところのカイロスはそういった天時である。その天時は必ず永遠とつながっている。永遠というものはただ無限の時間の連続ではない。そういう面もあるでしょう。けれども、永遠は質的に滅びざるものが永遠です。即ち、永遠というものは滅びざる生命と非常に大事な関係があるものが、この永遠という質の時間であります。

だから、現象の奥に、根源現象に注目しなくてはいかん。相対的現象の現実の奥に、根源の現実というものに自分を結びつけて生きていると、そこにカイロスが見えてくる。「ウル・フェノメノン」(根源現象)、「ウル・ビルクリッヒカイト」(根源現実)。真理というものは、そういう両面の矛盾関係の中に、^{はかな}儚きものの中に、ただ儚くないものを見ている。儚きものをただ、

「儚きものはしょうがないから私は永遠の中に入る」

と言って山の中に籠もってしまったらしょうがない。その相対的現実の中に楽に処しながら、しかもその奥に儚くないものを見る。たとえばこの花はまことにきれいだであるが、今にこれは枯れてしまう。しかし、その儚さを持つている花の中に儚くないものを見るか。散りゆく花に散らざる何ものかを見るかと。そういうことです。虹はうるわしい。しかし、その消えていく虹の中に消えざるものを見るかと。

● 神的權威

そういった質のものの見方をして、時においてそういった時の見方をし、時の感じ方をしている人はカイロスを捕まえる。そして、人に何と言われようと、



「私はかくせざるをえない」

という、あるものを捕まえて突進して行く。人がみな右に行くけれども、自分は左に行かざるを得ない。人が退いても、自分はそこに留まらざるを得ない、という在り方がそこから出てくるわけです。

キリストは、「ワッショイ、ワッショイ」とみんなにおだてられてしまつて、「ひとつやるか」なんて思いやしない。

「わが時はいまだ来らず」

と。そして、後からゆつくり忍びとなつて出かけて行く。そして、時満つれば、そこで宮に上つてはつきりと言う。

「私の教えは私のものではないぞ」

と。いくらラビがどんなに旧約の律法を学んだつて、そんなラビの学び方とはケタが違うぞというわけです。だから、キリストと問答すれば、いつも次元がずれているから、相手はどうにもならない。

そして、アモス、ホゼア、エレミヤ、イザヤ、そういう旧約の預言者たちがみな神の霊によつて語らしめられていた。その預言者たちの預言の内容がキリストにおいて、イエスという一身において全部その焦点を結んでいるわけです。焦点を結んでいるから、彼ら預言者たちが言っていることがみんなそこにおいて成就している。いかにその預言が成就しているかということをよく伝えているのがマタイ伝です。

即ち、彼自身が天国体である。彼自身が天国である。「天国」「神の国」という言葉は、「バシレイア」というのは「神の支配するところ」です。イエス・キリスト自身が神によつて支配されているところの実体である。だから、権威を持つている。神的権威を持つている。その後の方にも出ていいるでしょ。

「⁴⁶下役ども答う『この人の語るごとく語りし人は未だなし』」(ヨハネ7・46)

と。その人が言うようなものの言い方をしていいる人は未だかつてない。いわゆる学者とは違う。「権威ある者の如く語る」と言う。「如く」ではない。あれは

「権威ある者として、権威ある者らしく語つた」

ということ。あの「如く」は「らしく」と訳した方がいい。あれはマタイ伝の山上の垂訓の終りの方にある言葉です。「権威ある者らしく」ということ。本当の権威を持つている。権威というのは霊的な権威であつて、なにか威圧するところの権力ではない。

⁴⁵而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に帰りたれば、彼ら問う『なに故かれを曳き来らぬか』⁴⁶下役ども答う『この人の語るごとく語りし人は

未だなし』

なぜ、連れてこないかと。この人の語るごとく語る人はいまだいないので実は恐れましたと。あなた方が相手にするようなのはちよつとケタが違うんだよというわけだな。



●時は縮まれり

「カイロス」のことでもう少し引きましょうか。ローマ書3章26節、ここは有名な非常に大事なところです。

「²⁶これ今おのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義

とし給わん為なり。」(ロマ3・26)

「これ今の時おのれの義を顕して」という。即ち、神さまがキリストをとおして自分の義を顕しなされた。この場合の「自ら」はキリスト。キリストが神の義であって――神の義というのは即ち、神の意志を完全に体现することを義といいますから――神の意志を完全に体现する。身体でもって現じた。その事態が義ですから。

「神の義が福音のうちに現われた」

というのが正にそのことです。キリストにおいて神の意志が、その恵みの意志が現われる。今は正にその「今の時」という、神の義の現われる時が正にカイロスであった。その他は、「義」と一生懸命で旧約では言っているんだけど、本当の意味において神の義が現われていなかったんです。

コリント前書7章29節に、

「²⁹兄弟よ、われ之を言わん、時は縮まれり。」(コリント前7・29)

とある。「時は縮まれり」というのはパウロが、終末の時がもう近づいていることを「時は縮まれり」と言った。即ち、使徒たちはみな神の国が本来に来臨すると正直、思っていたから。世の終りですね。イエス・キリストもそうです。世の終りでそういった時が、新天新地の来臨するところの時がもう迫っているということです。

二千年経つても、その時は来っていない。来ていないけれども、実はこの終末的現実という、終末的現在というものは、我々の中にいつもやって来ているわけです。即ち、キリストの霊を受けた者が実は本当に終末的な時を迎えていることです。プニューマ、ガイスト、霊を。だから、この霊を受けなければ、その「時」の意味が出てこない。終末的な時の内容がこの神の霊でありますから。「神の霊を受けている」ということは即ち、「神の支配の中にある」「神の懷の中にある」と同じことになりますから、自分たちが天国体となって、天国をそこに来らしめている。

「極楽は東方何万億土の所にある浄土ではない。汝の身にある」

と言うのと同じことでもあります。

「²(神いい給う『われ恵の時に汝に聴き、救の日に汝を助けたり』と。視よ

今は恵のとき、視よ今は救の日なり)」(コリント後6・2)

「今は恵のとき、救の日なり」

という有名な言葉がコリント後書6章2節にある。

「¹⁰即ち時満ちて経綸にしたがい、天に在るもの、地にあるものを悉くキリ



ストに在りて一つに帰せしめ給う。これ自ら定め給いし所なり。」(エペソ1:10)

「時の満つるにおよんで」

というのもエペソ書1章10節にある。どの書簡にもみな出ています。黙示録22章10節にも、

「¹⁰また我に言う『この書の預言の言を封ずな、時近ければなり。』」(黙示録22:10)

「時が近づいている」

というあの「時」もそうです。

●万の事には時あり

旧約聖書で「時」のことをまた言い出したらきりがなから、もう適当にしておきますけれども、伝道の書3章は有名なところですよ。

「¹天が下の万の事には時あり。²生るるに時あり、死ぬるに時あり。植えるに時あり、植えたる者を抜くに時あり。³殺すに時あり、医すに時あり。毀つに時あり、建つるに時あり。⁴泣くに時あり、笑うに時あり。悲しむに時あり、躍るに時あり。⁵石を擲つに時あり、石を集むるに時あり。懷くに時あり、懷くことをせざるに時あり。⁶得るに時あり、失うに時あり。保つに時あり、棄つるに時あり。⁷裂くに時あり、縫うに時あり。黙すに時あり、語るに時あり。⁸愛しむに時あり、惡むに時あり。戦うに時あり、和らぐに時あり。」(伝道3:1-8)

という。

幼年時代には、「お伽話を読むに時あり」だ。こういう本はどういう時代に読むか。幼年、少年、青年といういろいろあるわけですね。はじめから、「社会、社会」とやりすぎるから、おかしいことになってしまう。もつと夢を見るような世界を小さい時の魂には豊かにうるわしく与えておかなくてはいかん。それをこの頃は、妙な怪物が出てくるものばかり読んでいるね。ああいうことをしてしまつたら、本当に魂を損ねる。

政治的な活動するに時ありだ。大学生は真理を研究するなら、いくら何を研究しても一向差し支えないが、それをすぐ政治的な行動に出るのはとんでもない。とにかく、本当に秩序を保ちながら、しかもその中にいくらでも正しい意味において自由があるのであります。法則にのつかることが本当の自由なんです。

「万の事には時あり」

と、伝道の書3章におもしろいことが書いてありますが、要するに、

「本当に自分が天に即したペースをくずすな」

というような——マイペースという言葉があるけれども、主観的なマイペースではダメだ



――天に即したペースに従って動いていけば、大事な時に本当に自分が自分を乗り越えていくことができる。自己を本当に乗り越えて進んでいかなければ。そういった意味における時のつかみ方をしながら展開していかなくてはならないわけです。

●内接円的關係

²⁵ 爰にエルサレムの或る人々いう『これは人々の殺さんとする者ならずや。

²⁶ 視よ、公然に語るに之に対して何を言う者なし、司たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。²⁷ 然れど我らは此の人の何処よりかを知る、キリストの来る時には、その何処よりかを知る者なし』²⁸ 爰にイエス宮にて教えつつ呼わりて言い給う『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。されど我は己より来るにあらず、真の者ありて我を遣し給えり。

「お前たちの知っている知り方はまだ相対的なんだ。私は本当はお前たちの知っているような知り方ではわからない」

と。「真の者」(アレーティノス)があつて、即ち神さまが自分を遣わしたまえりと。

汝らは彼を知らず、²⁹ 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給ひしに因りてなり』

いかにキリストの自覚がもう完全に神によっているか。神なきキリストは絶対に考えられない。「イエス」といえば、そこには主なる神がちゃんと二重写しになっているわけだ。内接円の關係になっている。

「我と父とは一つなり」

という。これは内接円だから、外側に離れているのではない。これが、キリストが神を信じている――信じ入る、信入とでも言いたい――信じ交わっている世界です。信入信交しているところの、交わっているところの事態。その中で呼吸しているところの存在。その懐の中に坐りこんでいるところの存在。このようなのが、遣わされたるキリストの事態です。

その点で中世の神秘家たちには、とにかく「その中」という面で非常に強い角度を持っていた。その意味において神秘家たちの在り方のある大事な面をつかみそこなっていた。プロテスタントは、「神秘家」というとパツと切ってしまうのはとんでもない。

それはキリストにおいて、キリストが仲保者としてちゃんと神と私たちをつないでくれる。もう「キリストの中に」あれば、即ち神の中にあるという、そういう在り方をもって本当に中に入ったのが、パウロもヨハネもペテロもみんなそうです。だから、

「自分はキリストと一つ」

と言っているこの一如の角度です。そのとき使徒たちはみな同軌であります。同じ軌道に乗っている。何を言おうと彼らはそこからのものを言っている。

我々はクリスチャンと言いながら、いつもなにか外側からただ「十字架だ」とか、やれ「復



活だ」とか、そんな命題ばかりしゃべっていたってどうにもならん。中に入って、もう自分はダメなやつだと言って――ダメでも何でもいいですよ――その中に本当に入っていないかなくては。

「何と言おうと、私はこれでは生きてられません」

ということがはつきり言えなくてはいいかん。

「小池先生はどのような」

と言つて出て行くやつは出て行つていい。私はもうそれでなければいけない人間なんだ。そういうガラクタはその中に入って、ガラクタでなくなつて、変質変貌させられている。そのことが大歓喜の音信である。私は自分でどうにもならん。このことを言わないでは、そのためには私はもう死に至るまで福音を告白せざるを得ない。何と言われても。正直、そういうような天衣無縫式なことにだんだん成っていく。だから、ありがたいわけですよ。

●盛んなる霊的生命の世界

30 爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。

さすがに、その時をつかんでいるキリストには、侵すべからざるものがあるから。

31 斯て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト来るとも、此の人の行いしより多く徴を行わんや』と言う。

「たとえキリストがやつてきても……」なんて、まだそんな言い方をしているけれども。

32 イエスにつきて群衆のかく囁くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・

パリサイ人ら彼を捕えんとて下役どもを遣ししに、33 イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。』

「やがてお前たちがよつてたかつて私を十字架につけるが、もうしばらくのことだよ」と。

34 汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず

「いくら尋ねたつてダメだよ、私はもう天界に入つてしまふから」と。キリストは神さまの中に入ることがひとつの楽しみだからね。今でも入っているんだけど。地上を去つて天界に行く。パウロも言っているでしょ。

「自分はお前さんたちのためにはまだ生きるけれども、私の本当の願いはさつさとキリストの中に入つてしまいたい。天界に行きたいんだ。この二つの中に板挟みになっている」

なんてパウロは言った。「死ぬるははるかにまされり」と。「死ぬ」というのはパウロにとつてはキリストの中に飛び込んで生きることなんです。そういう、中に入つてしまふ。

「お前たちは尋ねたつてダメだよ。私は今度は、上から降りてくるから」

と。もう一遍おりてくる。今度は御霊として、聖霊として降りてくるわけです。この「聖



霊として降りてきたらば」ということはまだここでは言っていないかもしれませんが、それを時々弟子たちに言っているわけです。

³⁵ 爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいずこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りおる者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。

どこかに亡命していくかと。こういう会話をしていると、しよつちゅう相対的次元でものを言っている。

³⁶ その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』

どういふことなんだろうかと。キリストは十字架を突破して、復活して光の中に入っていく。その驚くべき霊体として神の中に入ってしまうことが、彼らにはとうてい分かりませんから。なんと盛んなる霊的生命の世界かと思う。

³⁷ 祭の終の大なる日に

一週間続きますからね、

イエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば我に來りて飲め。

最後のせりふを入ったわけです。

「魂が渴いたら、私のところに来て、霊的な水を飲め」

ということですよ。

³⁸ 我を信ずる者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』

これは出エジプト記から持ってきた言葉だな。「その腹から活ける水が川となりて流れる」ということは実はヨハネ伝4章で、前にキリストがサマリヤの女に言った有名な言葉です。

「¹³ イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。

ヤコブの井戸から水を飲む者はみな渴いてしまふ。』

¹⁴ 然れど我があたうる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』(ヨハネ4・13・14)

と。もちろん、聖霊のことです。「そんな水は一体どこにあるんですか」なんて、また問答しているわけです。

³⁹ これは彼を信ずる者の受けんとする聖霊を指して言い給いしなり。イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざりしなり。

「御霊いまだ降らざりしなり」というのは、「まだ人々に降らない」ということですよ。キリストにはちゃんと来ているんだから。ちよつと妙な訳し方をしているけれども。「イエス未だ栄光を受け給わざれば」ということは、「十字架を通つて復活しない」ということを「栄光を受けない」と言つた。栄光を受けないので、御霊がまだ人々にはやって来ない。キリストが復活して、それから40日間顯れて、昇天して、それから10日間みんなが祈つて、復



活して50日目に聖霊が臨んできた。だから、ペンテコステ、五旬節という。みんなにはまだ聖霊が来ていない。

●無私の場にこそ聖霊が臨んでくる

十字架で罪の贖いを本当にみんなが受けとらなければ。まだ、

「あの人がどうだ、この人がどうだ」

なんて言っているうちは問題にならない。決定的に自分が神の前に、この自我というものがぶつつぶさされているのが、十字架でぶつつぶさされていることだから。十字架で贖われているんだから。

「今の自分がどうであるか」

なんて、そんなことは問題でない。この十字架の贖いを本式に受けとって――そこはもう無の場ですから、罪から解放されている無の場だ。自我が無い、無私の場ですから――無私の場にこそ聖霊が臨んでくる。十字架を本当に受けとって、私無き世界が開示されるから、そこにこの聖霊が臨んでくる。そうすると、自分自身がどんなにガラクタであろうと、その中に無私の場が与えられていますから、そこに入ってくる。それが即ち、御霊です。

もうこれが入ってきたらば、それをしょっちゅう呼吸しているような、そういうった天の気を吸っている魂となったら、それはもう楽になる。本当の力がくる。「どうだ、こうだ」と言う人は、自分が実はその審きによつて神に審かれる。自分が実はそういう性格を持っているから、そういうことを言うことになる。それで、楽に大胆率直な行動がそこから出てくるわけです。

そこで、十字架という事態を通さなければ、彼らにまだ本当に聖霊が臨むわけにいかない。一時的には霊が臨むということはありますよ。それでも、本当の意味において根源的な意味では来ない。それは贖いがなければ来ない。

40 此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ真にかの預言者なり』といい、

41 或人は『これキリストなり』と言い、又ある人は『キリスト争でガリラヤより出でんや、⁴² 聖書にキリストはダビデの裔またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。⁴³ 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争^{あらそい}おこりたり。⁴⁴ その中には、イエスを捕えんと欲する者もありしが、手出する者なかりき。

キリストがメシヤかメシヤでないかということが非常に問題となった。

45 而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に帰りたれば、彼ら問う『なに故かれを曳き来らぬか』⁴⁶ 下役ども答う『この人の語るごとく語りし人は未だなし』⁴⁷。パリサイ人等これに答う『なんじらも惑わされしか、⁴⁸ 司^{つかさ}たち又はパリサイ人のうちに一人だに彼を信ぜし者ありや、⁴⁹ 律法を知らぬこの



群衆は

パリサイ人たちがいわゆる「アムハアーレツ」「地の民」といつて、律法を知らない普通の庶民のことを侮蔑している。

詛われたる者なり』⁵⁰ 彼等のうちの一人にて曩にイエスの許に來りしニコデモ言う、⁵¹ 『われらの律法は先その人に聴き、その為すところを知るにあらざば、審く事をせんや』⁵² かれら答えて言う 『なんじもガリラヤより出でしか、查べ見よ、預言者はガリラヤより起る事なし』

そういう預言は聞いたことがない。ベツレヘムから出ると。

⁵³ 斯ておのおの己が家に帰れり。

●迦葉刹竿

無門関の中からある一か所を引用します。無門関の第22則のところに「迦葉刹竿」というのがある。

「迦葉、因みに阿難に問うて云く。『世尊、金欄の袈裟を伝づるの外、別に何物をか伝つ。』

葉、喚んで云く、「阿難」。難、応諾す。葉云く、「門前の刹竿を倒却著せよ。」

(あるとき阿難が迦葉に、「釈尊はあなたに金欄の袈裟を伝えられた以外に、別に何かを伝えられたのではありませんか?」と尋ねた。そこで迦葉は、「阿難」と喚びかけた。阿難は「はい」と返事をした。迦葉は言う、「もう幡竿をおろしなさい」と。)

迦葉というのはお釈迦さんの一番弟子です。阿難とは本当はアーナンダという。アーナンダというのは歓喜という意味だそうです。世尊から衣鉢をつぐ金欄の袈裟です。これを伝えられるほかに別に何ものが一体お釈迦さんから伝えられたのかというわけです。これは迦葉が阿難に聞いているのは、阿難が実はお釈迦さんが生きていううちはあまり本当の世界に入らなかったとみえますね。お釈迦さんと姻戚関係になっている。非常に可愛がられた。ちょうどヨハネみたいな人ですよ。ところが、迦葉は阿難の悟りの時が満ちたのみたわけです。それだから、迦葉が特に「阿難」と非常に力強く呼んだらしい。その時に、「阿難、応諾す」と書いてある。これはひたたく言うのと、「はい」と応えたということ。迦葉が阿難に対して名前を呼んだ。そうしたら、「はい」と応えた。ある時に本当に全存在をもって「はい」と応えるということが、即ち、このカイロスを本当につかむ魂の気合なんです。それから、阿難はその次の世界に突き進んだらしい。

我々の福音の問答の中で、こうやって福音を受けとっているなかで本当に自分の存在を呼ばれて、そして全存在をもって「はい」と応えて――「はい」と応えるということは、相手の世界を全面的に受けとるということ。だから、「はい」と言うことが即ち本当の信なんです。「然り」ということ。

「然り、アーメン」



と祈るけれども、その事態に対して「然り」と言うことはもうひとつ言い換えると、「然り。はい」と言うことがその世界に自分を結局、投入することになる。

全存在をその中にぶちまけるような角度の「はい」という、そういう魂が今の若い人たちにいかに少ないかと私は思うんです、正直。いつも「それでも」とか言って考える。考えたり分析したりばかりしている。本当に「はい」と言っている中に入っている、それからちゃんと一如の世界から素晴らしい明晰な明知が湧いてくるんです。

その「然り」と言う世界は絶対界だから、絶対界に入ってから本当の明知が湧いてくるのであって、相対界でいくら分別しようとしたって、いわゆる分別ではダメだと禪宗の方でも言っているとおります。分別を超越した世界に入ると本当の分別が出てくる。ここは本当は無明なんだよな、無明の世界。明の世界に、この明知の世界にこの「はい」をもつて入っていく。「はい」で入る。そうすると、そこから

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば」

という。相対的現実では声なんか聞こえませんよ。鳴かない小鳥が親鳥を慕っている、その声が聞こえてくるという。だから、

「生れぬさきの父ぞ恋しき」

ということになる。鳴かぬ鳥の小鳥の声が聞こえてくる。ああ小鳥は父を慕っているなあ、私も本当にそれを聞いて、生れぬさきの父が恋しいと。

そういうようなわけで、「はい」と言っている世界に自分を突入させると、そこから本当の力も、本当の智慧も、本当の愛も、本当の生命も、みんなそこにある。

どうぞ、若い方々がもつと――究極な言葉でいうと――本当の気合、をつかまなくてはいい」という全存在的投入の応えなんです。だから、非常に簡単な世界から、一如の世界から、もの凄い無限の展開をすると申し上げているのはそのことです。

そして、昔はお説教をしたときに、なにか旗印を立てたそうだと。その旗印をひっくり返してしまおう。「倒却著せよ」と言う。その旗印はひっくり返してしまえと。ということは、旗印がものを言っているのではない。旗印をひっくり返して、本当にお前さんが今までにお釈迦さんから得たこと――それは袈裟ではない。袈裟の奥の世界だ――それを本当に受けければ、あの第六祖の場合と同じように、袈裟が欲しければやるよと。どっこい、その袈裟にもう霊が通っているものだから、袈裟を奪おうとしたやつが、石の如く重くしてそれが取れないという。その言うべからざる内容と袈裟とが一つになっている。

パウロだってそうですよ、みんな。福音が彼の中に化体していれば、パウロの衣に触ったら病が治ってしまったという。イエスの場合もそうです。要するに、そういった一番根源的な受け方を、この阿難が「はい」と言った、この一言でそのカイロスをつかまえて次の世界に入っていく。では、おしまい。

